

私の工夫

私が大切にしていること
私の立ち位置から

笠岡市立笠岡東中学校

指導教諭

山口美津子



1 はじめに

「夢や自己肯定感が持ちにくい生徒は、将来に対する展望や自信が持てず、授業に対する積極性や忍耐力を発揮できない。」本校の生徒は少なからずこの傾向にあるということは、全国学力・学習状況調査の結果からも明らかになっている。

そこで生徒が抱えている課題や実態を分析し、本校では3年前から、生徒と生徒、生徒と教師、教師と保護者、地域と学校がつながり合う中で、本校が以前より抱えてきた問題や困難さを克服したいと考え、「つながり合い、高め合いながら、意欲的に学ぶ生徒の育

成」を研究テーマに設定し、実践をしてきている。その中で、学級担任としての自身の取組を紹介する。

2 学級担任としての工夫

文部科学省が2002年に行った全国実態調査によると、普通クラスに在籍する児童・生徒の中で、知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を示し、ADHD、LD、アスペルガー症候群などの可能性があるため特別な教育的支援が必要な子どもの割合は6・3%だったということから、普通クラスに2人か3人は特別な教育支援が必要な生徒がいる

ということになる。本校でも、他者への配慮や気配りの希薄さ、コミュニケーション能力の乏しさ、規範意識の低さなどが目立つ生徒が増える傾向にある。

4月、私が担任した学級も例外ではなかった。短気でキレやすく、感情や衝動性のコントロールができず、物や人に当たる。人の本や筆箱を投げる、壊す。教室や机に落書きをする。ずっとしゃべり続ける。そういった多動傾向の男子生徒Aがいた。Aが落ち着かず騒ぎ始めると、簡単に他の生徒に広がり、收拾がつかなくなる。いわゆる学級崩壊である。

男子の中には、目立った行動をするAをあおり、楽しむ雰囲気もあった。また、集団の中でよりよい人間関係が築けず、自己肯定感が低い生徒もかなりいた。しかし、そんな学級を「何とかしたい」という思いをもった女子生徒もいた。

私は、学級全体でAを受け入れる学級経営を目指そうと思った。仲間から認められ、大切にされたという経験は、Aや自己肯定感が低い生徒たちに大きな勇気と自信を与える。そしてその自信は、仲間とふれ合う心地よさ、安心感となり、人を大切にすると人権感覚へと高められると考えた。



99%のクラス1%は許し合うゆとり

会でその行いを伝え、クラスみんなで感謝の気持ちを拍手で表した。そんなつながりの中にAも、クラスで自分を生かそうとする姿勢が見え始めた。

○「いじめをやさし」

問題行動が起きたときが、AやAの保護者とじっくり話ができるチャンスだった。Aは言葉で自分の思いや気持ちを表現するという事に自信がなく、強い抵抗を示した。そして思い通りにならない苛立ちを人や物にぶつけていたのだ。育ちや生活環境、Aの生活経験から、「わかってももらえない」「認めてもらえない」という大人への不信感が強かったようである。Aは落ち着いて1対1で話すと、素直に自分の取った行動を振り返って反省したり、自分の気持ちを語ったりした。そしてそのときのAのくやしかった気持ちや嫌な思いを受け止めながら、これから取るべき行動を一緒に考えた。Aは「ごめんなさい」という言葉で自

分の取った行動に対して、自分できちんと責任がとれるようになってきた。Aとのかかわりは、保護者との関係を良好なものにした。しかし、わかっても行動に移せないことが、Aのストレスにもなり、Aの攻撃性はなかなか収まらない。とにかく、Aが問題行動を起こしたとき、Aの思いを聴き、担任の思いを伝えることを繰り返している。少しずつではあるがAが変わっていく手応えを感じている。

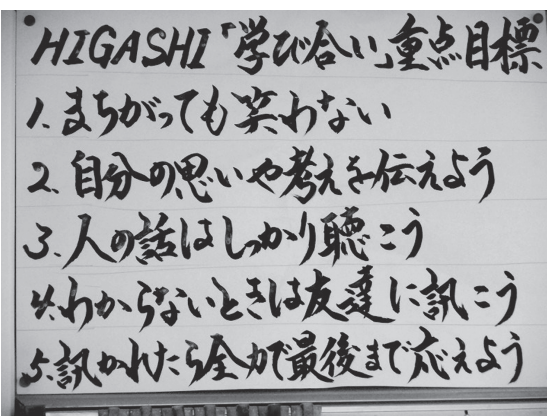
○Aを学びの中へ

授業では、Aはじつと座ってられない。立ち歩いたり、友だちにちよっかいをかけたたり、ずっとしゃべり続けている。教師が制止してもなかなか止まらない。

私は班長を活用することにした。班長会で班の問題点や改善点を話し合い、それらに対する解決方法を話し合った。もちろんAの対応になると、話し合いが難航する。しかしそれでも生徒たちはあきらめず、「Aのために」「自分たちの

ために」「クラスのために」と、よりよい方法を考えた。机がコの字ということもあり、①日々の生活の中でAに積極的にかかわっていく、②生活班でAに注意をする、③4人の学習グループでAに勉強を教える、ということに取り組むことにした。席替えも班長が行った。「Aが信頼している人は誰か」

「誰がAにかかわれるか」、いろいろな視点から、学習グループや生活班を考えている。今、Aは友だちに勉強を教えてもらったり、先生に質問をしたりして自主的に



学び合い重点目標

3 おわりに

2年前まで校内暴力や器物破損、授業崩壊などの問題を抱えていた本校が、このような「つながり合い」を重視した授業や生徒活動に取り組み始めて3年目、学校全体に落ち着いた雰囲気生まれ、問題行動が減少してきた。このことは、生徒同士や生徒と教師の間の相互に豊かな人間関係の構築が生徒の望ましい大きな成長につながってきているからと思われる。しかし、本校には家庭から十分な愛情が受けられていない生徒や、自尊心がうまく育めず将来への展望が持てない生徒、学びから逃避しがちな生徒など、気になる生徒は少なくない。だからこそ私は生徒に寄り添い、信じて見守る教師でありたいと思っている。